

◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆

これまでのあらすじ

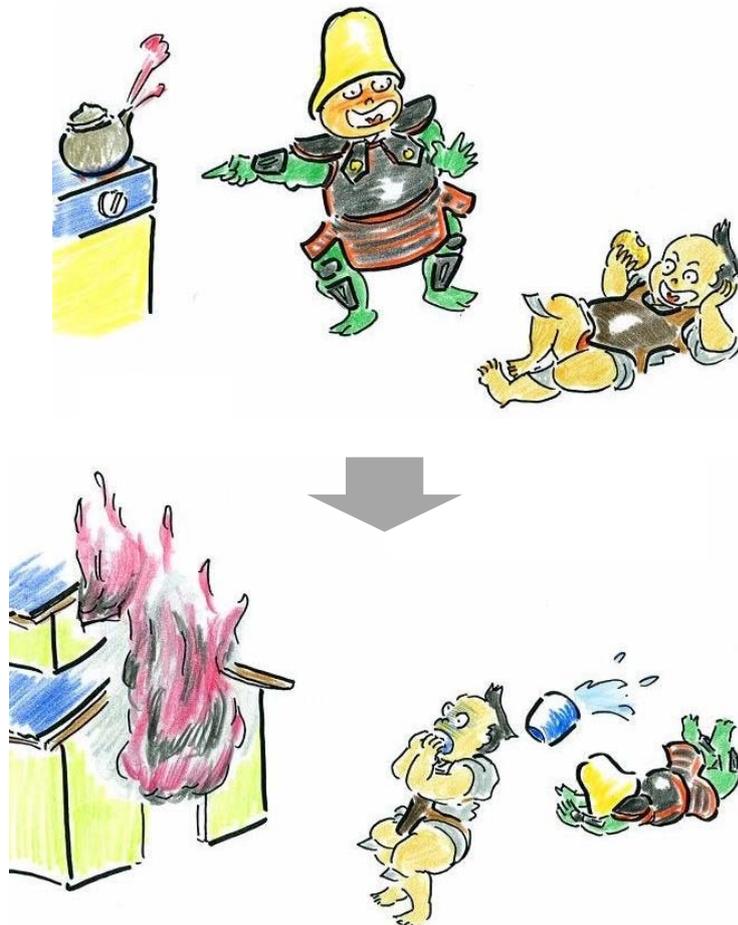
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の^{ちゅうげん}中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだあい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.36

「おお、空気が澄んで・・・良い天気ですなあ旦那様。」とお屋敷の点検のため番小屋から庭に出たご助は、晩秋の朝の冷たい空気を吸い込みながら拙者に話しかけてきたのじゃった。

「おお、そうじゃの、これぞ小春日和というやつじゃな。」と拙者が言うと

「こ、小春び・・・？何でやすか？裏の飼い猫の小春殿がどうかしたんでやすか？」と真顔で聞き返すご助に、ちょっとからかってやろうという気が起きましてな、



「ああ、昨晚のことじゃ、裏の小春がな拙者の所にやって来てな、拙者が『こ
う毎日雨じゃと気がめいりますなあ』と小春に話すと『にゃんじゃ？しえんは
晴れが好きか？』と聞いて来たんじゃ。」

「へ、へええ・・・旦那様にも猫殿の友達がいたんでやすね。」とご助。

「そうさな。それで『明日晴れたら鰹節をくれるか？』と小春がいうから『良
いとも。明日晴れたら鰹節1パックやろう。』と約束したのじゃ。」と拙者が
言うと



「そ、それで今日はこんないい天気になんか？・・・で、猫の小春殿のお陰じゃから小春日和って言うんですかい？」と聞いてくるご助に

「そうじゃ。小春殿は天気を操れるんじゃよ。」と言うと、ご助の奴、まんまと話に乗おってきましてなあ・・・それで

「小春だけではないぞ。ミー殿だって操れるのじゃよ。小春が操るのは快晴じゃがミー殿は雪や雷じゃな。」と冗談を重ねますと

「ええっ？ミー、ミー殿は雪に雷様を？ほ、本当ですかい？」と驚くご助に
「本当じゃとも。お前は去年の秋葉神社の一件を忘れたのかい。」と拙者が話すと、

「と、とんでもねえです。あの痛みは忘れやせんぜ。そ、そっか、ミー殿は雪に雷様かあ」と虚空を眺め、秋葉のお社で雷様に撃たれた衝撃を思い出し、震えながらも何かしら思案を巡らせておるようじゃった。

そのご助の様子を見ながら 『しばらく本当のことは伏せておこうかのお』

と拙者は思ったのじゃった。



それから数日、この時期としては不思議なくらい連日の晴天に恵まれてな

「有難いのお、ここ数日の小春日和は・・・」と拙者は喜んでおったのじゃ

が、ご助の方は毎日のように近所のスーパーで鯉節のパックを買い、せっせと

ミー殿に与えておった。

「何をしておるんじゃろうのお」と不思議には思ったが、どうせご助のすることじゃと、拙者は気にも留めなかったのじゃった。

それから更に数日、好天が続いた頃でござったかのお、お屋敷の裏手でご助がミー殿に詰め寄っておったのじゃ。



物陰から聞くとともになしに聞いておると

「ミ、ミー殿、あまりと言えばあまりにも殺生ですぜ。こう毎日鰹節だけ持っていかれちゃ、あっしの懐に空っ風が吹くってもんですぜ。一体何時になったら雷様がお越しになるんで？」とわめくご助に

「にゃにいつてるのかわからにゃい」と答えるミー殿

「分からないのはミー殿じゃねえですか！旦那様から聞いて知ってるんですぜ、ミー殿は雷様を扱えるんでやしよ？ だからこうして毎日頼んでるんじゃねえですかい。秋葉様でアッシがこうむった雷撃の痛みを今一度旦那様に食らわせてやりたいって・・・」とまくし立てるご助に

「にゃから、ミーちゃんには、そんな力はいにゃいの。毎日鰹節を貰っておいで申し訳にゃいけど、あたしシーチキン派なのよどっちかって言うと。」と答えるミーちゃんに



「な、何を言いやがる！ 散々鯉節を食い散らかしておいて今更シーチキン派だと？てやんでえ、この2週間、旦那様の背後に重い加賀丸の槍を立て付き従って、今落ちるか、さあ、今じゃ雷様よ、この突き出した加賀丸に落ちなされと、念じておると言うのに雨さえふりやしねえ！やいミー、食い逃げは許さないぜ。」と食事中的ミー殿から鯉パックを奪おうとするのじゃった。



「あ、危ないっ！！」と、拙者が叫ぶより早く、電光石火のネコパンチが・・・
ミー殿の容赦のない両手ネコパンチが、パシッパシッパシッパシッ・・・とご
助の頭を左右から襲ったのじゃった、



「にゃに訳のわからにゃいこと言ってるのよ。」と、捨て台詞を残し、モンローウォーク、いや、キャットウォークでミー殿が立ち去った後にはボロ雑巾のようなご助が転がっておった。

「だ、大丈夫か！」とすぐさま駆け寄ろうとする拙者の心に「主を雷に撃たせようとする家来を助ける義理があるのか？」という思いが去来。

「自業自得じゃな。」と捨て置くこととしたのじゃった。

「しかし危ないところじゃったな。ご助め、最近は拙者の供回りとか、露払いとか申して付き従い、拙者の傍らで先祖伝来の名槍『加賀丸』をやけに高く掲げるものじゃ、と感心しておったものを・・・そんな魂胆があるとは思ってもよらなんだわい。」と、ご助の側で転がる『加賀丸』を拾い上げたのじゃった。

「まあ、拙者の小春日和からこうなったのじゃから可哀そうといえは可哀そうじゃがの。」と、転がったままのご助をおぶると、番小屋へと向かったのじゃった。

「あ、だ、旦那様。」と拙者の背で意識を取り戻したご助は

「も、勿体ねえこととございやす。あっしは旦那様を雷様に・・・」と続けるご助を遮り

「のおご助よ。小春日和と言うのはじゃな、猫の小春どのが操る天気ではのおて・・・」と話したところで

「あ、だ、旦那様！ あ、あれを・・・」とご助が指さす方を見れば、ミー殿がお屋敷の大屋根の上で何やら招き猫のように手を動かしておった



「だ、旦那様、大変ですぜ。あれは雷様を呼んでるんですぜ。」と叫ぶご助に

「ははは、大丈夫じゃ。ミー殿にそんな力はないよ。それにお屋敷の大屋根には避雷針が付いておろう。大丈夫じゃ、心配には及ばんよ。」と拙者はご助を安心させるように話したのじゃった。

じゃが、拙者の背のご助は

「だ、旦那様、後生じゃ降ろして下せえ。あ、あっしが避雷針のことを知らねえとでも？こ、この計画を立てた時に、お屋敷と番小屋の避雷針は取り外してあるんでさ。」といよいよ大きな声で騒ぐのじゃった。

「お屋敷の・・・避雷針を・・・外した?? き、き、貴様は何ということ
を!・・・」とご助を振り落とそうとした刹那、

バリバリバリっと大音響がさく裂したかと思うと

ビシッ と鈍い音とともに拙者の手にした名槍『加賀丸』に衝撃が走り、拙者はご助ともども青白い光に包まれたのじゃった。



これから本格的な冬のシーズンを迎えるにあたり・・・避雷針の点検は十分にしなければ・・・ああ、寒ブリが食べたいのう・・・拙者は薄れゆく意識の中で、思ったのじゃった・・・。

(つづく)